

学者アラムハラドの見た着物

宮沢賢治

青空文庫

学者がくしやのアラムハラドはある年十一人の子を教えておりました。

みんな立派りっぱなうちの子どもらばかりでした。

王さまのすぐ下の裁判官さいばんかんの子もありましたし 農商のうしようの大だいじ

臣みんの子も居いました。また毎年じぶんの土地から十石とくの香油こうゆさえ
獲とる長者ちやうじやのいちばん目の子も居たのです。

けれども学者のアラムハラドは小さなセララバアドという子が
すきでした。この子が何か答えるときは学者のアラムハラドはど
こか非常ひじょうに遠くの方の凍こおったように寂しずかな蒼あおぐろ黒い空かんを感かんずる
のでした。それでもアラムハラドはそんなに偉えらい学者でしたから
えこひいきなどはしませんでした。

アラムハラドの塾じゆくまちは街のはずれの楊やなぎの林の中にありました。

みんなは毎日その石で畳たたんだ鼠ねずみいろの床ゆかに座すわつて古くからの聖せ歌いかを諳あんしよう誦しようしたり兆ちようよりももつと大きな数まで数えたりまた数を互たがいに加えたり掛かけ合せたりするのです。それからいちばんおしまいには鳥や木や石やいろいろのことを習ならうのです。

アラムハラドは長い白い着物きものを着て学者のしるしの垂たれ布ぬののついた帽子ぼうしをかぶり低い椅子いすに腰掛こしかけ右手には長い鞭むちをもち左手には本を支ささえながらゆっくりと教えて行くのです。

そして空気のしめりの丁度ちようどいい日またむずかしい諳あんしよう誦しようでひどくつかれた次つぎの日などはよくアラムハラドはみんなをつれて山へ行きました。

このおはなしは結局学者のアラムハラドがある日自分の塾でまたある日山の雨の中でちらつと感じた不思議な着物についてであります。

一

アラムハラドが言いました。

「火が燃えるときは焰をつくる。焰というものはよく見ていると奇体なものだ。それはいつでも動いている。動いているがやつぱり形もきまつている。その色はずいぶんさまざまだ。普通の焚火の焰なら橙いろをしている。けれども木によりまたその場処によ

つては変へんに赤いこともあれば大へん黄いろなこともある。硫黄いおうを燃せばちよつと眼めのくるつとするような紫むらさきいろの焰えんをあげる。それから銅どうを灼やくときは孔雀石くじやくいしのような明るい青い火をつくる。こんなにいるはさまざまだがそれはみんなある同じ性質せいしつをもっている。さつき云いつたいつでも動うごいているということもそうだ。それは火というものは軽かるいものでいつでも騰のぼろう騰のぼろうとしている。それからそれは明るいものだ。硫黄いおうのようなお日さまの光の中なかではよくわからない焰えんでもまっくらな処ところに持もつて行いけば立派りっぱにそこらを明るくする。火というものはいつでも照てらそう照てらそうとしてゐるものだ。それから一つは熱あついということだ。火ならばなんでも熱あついものだ。それはいつでも乾かわかそう乾かわかそうとして

いる。斯う云う工合ぐあいに火には二つの性質がある。なぜそうなのか。それは火の性質だから仕方しかたない。そう云う、熱いもの、乾かそうとするもの、光るもの、照らそうとするもの軽いもの騰ろうとするものそれを焰と呼ぶよのだから仕方ない。

それからまたみんなは水をよく知っている。水もやつぱり火のようになんとききまつた性質がある。それは物ものをつめたくする。どんなものでも水にあつてはつめたくなる。からだをあつい湯ゆでふいても却かえつてあとでははずしくなる。夏に銅の壺つぼに水を入れ壺そとがわの外側を水でぬらしたきれで固かたくつつんでおこならばきつとそれは冷ひえるのだ。なんべんもきれをとりかえるとしまいにはまるで氷こおりのようにさえなる。このように水は物をつめたくする。また

水はものをしめらすのだ。それから水はいつでも低い処へ下ろうとする。鉢はちの中に水を入れるならまもなくそれはしずかになる。あのくだっち阿耨達池アヌタチやすべて葱嶺パミールから南東の山の上みずうみの湖は多くは鏡かがみのように青く平たいらだ。なぜそう平らだかとならば水はみんな下に下ろうとしてお互たがい下れるとこまで落ち着つくからだ。波なみができたら必かならずそれがなおろうとする。それは波のあがつたところが下ろうとするからだ。このように水せいしつのつめたいこと、しめすこと下に行こうとするいことは水の性質せいしつなのだ。どうしてそうかと云いうならばそれはそう云う性質せいしつのものを水と呼ぶのだから仕方しかたない。

それからまたみんなは小鳥を知しっている。うぐいす鶯うぐいすやみそさぎい、ひわやまたかけすなどからだかが小さく大へん軽かるい。その飛とぶときは

ほんとうによく飛ぶ。枝えだから枝へうつるときはその羽をひらいたのさえわからないくらい早く、青ぞらを向うむこへ飛んで行くときは一つのふるえる点のようだ。それほどこれらの鶯やひわなどは身み軽がるでよく飛ぶ。また一生けん命めいに啼なく。うぐいすならば春にはつきり啼く。みそさざいならばからだをうごかすたびにもうきつと啼ないでいるのだ。

これらの鳥のたくさん啼ないでいる林の中へ行けばまるで雨が降ふっているようだ。おまえたちはみんな知っている。このように小さな鳥はよく飛びまたよく啼くものだ。それはたべ物をとってしまっても啼くのをやめない。またやすまない。どうして疲つかれないかと思うほどよく飛びまたよく啼くものだ。

そんならなぜ鳥は啼くのかまた飛ぶのか。おまえたちにはわかるだろう。鳥はみな飛ばずにいられないで飛び啼かずに居いられないで啼く。それは生れつきなのだ。

さて斯こう云うふうに火はあつく、乾かわかし、照てらし騰のぼる、水はつめたく、しめらせ、下る、鳥は飛び、またなく。魚について獸けものについておまえたちはもうみんなその性質を考えることができる。けれども一体どうだろう、小鳥が啼かないでいられず魚が泳およがないでいられないように人はどういことがしないでいられないだろう。人が何としてもそうしないでいられないことは一体どういう事だろう。考えてごらん。」

アラムハラドは斯こう言つて堅かたく口を結むすび十一人の子供こどもらを見ま

わしました。子供らはみな一生けん命考えたのです。大人のように指をまげて唇にあてたりまっすぐに床を見たりしました。その中で大臣の子のタルラが少し顔を赤くして口をまげてわらいました。

アラムハラドはすばやくそれを見て言いました。

「タルラ、答えてごらん。」

タルラは礼をしてそれから少し工合わるそうに横の方を見ながら答えました。

「人は歩いたり物を言ったりいたします。」

アラムハラドがわらいました。

「よろしい。よくお前は答えた。全く人はあるかないでいられな

い。病びよう氣きで永ながく床とこの上に居いる人はどんなに歩あきたいだろう。あ
あ、ただも一度いちど二本の足でぴんぴん歩いてあの樂地らくちの中の泉いずみまで
行きあの冷つめたい水を両りょう手てで掬すくつて呑のむことができたならそのまま
死しんでもかまわないと斯こう思うだろう。またお前の答こえたように
人は物を言いわないでいられない。

考考えたことをみんな言いわないでいることは大大へんにつらいこと
なのだ。そのため病氣病氣にさえもなるのだ。人がともだちをほしい
のは自分の考考えたどんなことでもかくさず話話しまたかくさずに聴き
きたいからだ。だまつているということは本ほん統とうにつらいことな
のだ。

たしかに人は歩あかないでいられない、また物を言いわないでいら

れない。けれども人にはそれよりもっと大切なものがないだろうか。足や舌したとも取りかえるほどもっと大切なものがないだろうか。むずかしいけれども考えてごらん。」

アラムハラドが斯う言う間タルラは顔をまっ赤かにしていました。がおしまいは少し青ざめました。アラムハラドがすぐ言いました。「タルラ、も一度答えてごらん。お前はどんなものでもお前の足をとりかえないか。お前はどんなものでもお前の足をとりかえるのはいやなのか。」

タルラがまるで小さな獅子ししのように答えました。

「私は饑饉ききんでみんなが死ぬしとき若もし私の足が無なくなることで饑饉がやむなら足を切つても口惜くやしくありません。」

アラムハラドはあぶなく涙をながしそうになりました。

「そうだ。おまえには歩くことよりも物を言うことよりも持つとしないでいられないことがあった。よくそれがわかった。それでこそ私の弟子なのだ。お前のお父さんは七年前の不作のとき祭壇に上って九日禱りつづけられた。お前のお父さんはみんなのために命も惜しくなかつたのだ。ほかの人たちはどうだ。ブランド。言つてごらん。」

ブランドと呼ばれた子はすばやくきちんと答へました。

「人が歩くことよりも言うことよりも持つとしないでいられないのはいいことです。」

アラムハラドが云いました。

「そうだ。私がそう言おうと思っていた。すべて人は善いこと、正しいことをこのむ。善と正義のためならば命を棄てる人も多い。おまえたちはいままでにそう云う人たちの話を沢山きいて来た。決してこれを忘れてはいけない。人の正義を愛することは丁度鳥のうたわないでいられないと同じだ。セララバアド。お前は何か言いたいように見える。云つてごらん。」

小さなセララバアドは少しびっくりしたようでしたがすぐ落ちついて答えました。

「人はほんとうのいいことが何だかを考えないでいられないと思います。」

アラムハラドはちよつと眼をつぶりました。眼をつぶったくら

やみの中ではそこら中ぼうつと燐りんの火のように青く見え、ずうつと遠くが大へん青くて明るくてそこに黄金こずえの葉はをもった立派りっぱな樹きがぞろつとならんでさんさんと梢こずえを鳴らしているように思つたのです。アラムハラドは眼をひらきました。子供こどもらがじつとアラムハラドを見上げていました。アラムハラドは言いました。

「うん。そうだ。人はまことを求めもとる。真理しんりを求めもとる。ほんとうの道を求めるのだ。人が道を求めないでいられないことはちやうど鳥の飛とばないでいられないとおんなじだ。おまえたちはよくおぼえなければいけない。人は善ぜんを愛あいし道を求めないでいられない。それが人の性せい質しつだ。これをおまえたちは堅かたくおぼえてあとでも決けつして忘わすれてはいけない。おまえたちはみなこれから人生という

非常ひじょうなけわしいみちをあるかなければならない。たとえばそれは葱嶺パミールの氷こおりや辛度しんどの流れながや流沙るさの火やでいっぱいなようなものだ。そのどこを通るときも決して今の二つを忘れてはいけない。それはおまえたちをまもる。それはいつもおまえたちを教える。決して忘れてはいけない。

それではもう日中だからみんなは立ってやすみ、食事しょくじをしてよろしい。」

アラムハラドは礼れいをうけ自分もしずかに立ちあがりました。そして自分の室むろに帰る途とちゆう中ふとまた眼をつぶりました。さっきの美しい青い景色けしきがまたはつきりと見えました。そしてその中にはねのような軽い黄金かろいろの着物きものを着た人が四人まっすぐに立って

いるのを見ました。

アラムハラドは急いで眼をひらいて少し首をかたむけながら自分の室に入りました。

二

アラムハラドは子供らにかこまれながらしずかに林へはいつて行きました。

つめたいしめった空気がしんとみんなのからだにせまつたとき子供らは歓呼かんこの声をあげました。そんなきに樹は高く深くしげつていたのです。それにいろいろの太さの蔓つるがくしやくしやくにその木

をまといみちも大へんに暗くらかつたのです。

ただその梢こずえのところどころ物もの凄すごいほど碧あおいそらが一きれ二きれやつとのぞいて見えるきり、そんなに林がしげつていればそれほどみんなどはよろこびました。

大臣だいじんの子のタルラはいちばんさきに立つて鳥を見てはばあと両手りょうてをあげて追おい栗鼠りすを見つけては高く叫さけんでおどしました。走はしつたりまた停とまつたりまるで夢むちゆう中で進すすみました。

みんなはかわるがわるいろいろなことをアラムハラドにたずねました。アラムハラドは時々はまだ一つの答こたをしないうちにも一つの返事へんじをしなければなりませんでした。

セララバアドは小さな革かわの水入れを肩かたからつるして首たを垂たれて

みんなの間といやアラムハラドの答をききながらいちばんあとから少し笑わらつてついて来ました。

林はだんだん深ふかくなりかしの木やくすの木や空も見えないようでした。

そのときサマシャードという小さな子が一本の高いなつめの木を見つけて叫びました。

「なつめの木だぞ。なつめの木だ。とれないかなあ。」

みんなもアラムハラドも一度いちどにその高い梢を見上げました。アラムハラドは云いいました。

「あの木は高くてとどかない。私どもはその実みをとることができないのだ。けれどもおまえたちは名高いヴェーツサンタラ大王の

はなしを知っているだろう。ヴェーツサンタラ大王は檀波羅蜜の
行と云つてほしいと云われるものは何でもやった。宝石でも着
物でも喰べ物でもそのほか家でもけらいでも何でもみんな乞われ
るままに施された。そしておしまいとうとう国の宝の白い象をも
お与えなされたのだ。けらいや人民ははじめは堪えていたけれ
どもついには国も亡びそうになつたので大王を山へ追ひ申したの
だ。大王はお妃と王子王女とただ四人で山へ行かれた。大きな林
にはいつたとき王子たちは林の中の高い樹の実を見てああほしい
なあと云われたのだ。そのとき大王の徳には林の樹もまた感じて
いた。樹の枝はみな生物のように垂れてその美しい果実を王子
たちに奉つた。

これを見たものみな身の毛もよだち大地も感じて三べんふるえたと云うのだ。いま私らはこの実をとることができない。けれどももしヴェーツサンタラ大王のように大へんに徳のある人ならばそしてその人がひどく飢えてゐるならば木の枝はやっぱりひとりでに垂れてくるにちがいない。それどころでない、その人は樹をちよつと見あげてよろこんだだけでもう食べたとおんなじことにもなるのだ。」

アラムハラドは斯う云つてもう一度林の高い木を見あげました。まつ黒な木の梢こずえから一きれのそらがのぞいておりましたがアラムハラドは思わず眼めをこすりました。さつきまでまつ青さおで光つていたその空がいつかまるで鼠ねずみいろに濁にごつて大へん暗くらく見えたのです。

樹はゆさゆさとゆすれ大へんにむしあつくどうやら雨が降^ふつて来
 そうなのでした。

「ああこれは降^ふつて来る。もうどんなに急^いいでもぬれないという
 わけにはいかない。からだの加減^{かげん}の悪い^{わる}ものは誰^{だれ}々^{だれ}だ。ひとり
 もないか。畑^{はたけ}のものや木には大へんいいけれどもまさか今日^{こんにち}こん
 なに急^{きゆう}に降^ふるとは思わなかつた。私たちはもう帰^{かえ}らないといけな
 い。」

けれどもアラムハラドはまだ降^ふるまではよほど間^まがあると思^{おも}つ
 ていました。ところがアラムハラドの斯^こう云^いつてしま^まうかしまわ
 ないうちにもう林^{はやし}がぱちぱち鳴^なりはじめました。それも手をひろ
 げ顔をそらに向^むけてほんとうにそれが雨^{あめ}かどうか見^みようとしても

雨のつぶは見えませんでした。

ただ林の潤いひろ木の葉はがぱちぱち鳴っている〔以下原稿数枚？なし〕

入れを右手でつかんで立っていました。〔以下原稿空白〕

青空文庫情報

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年4月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月～

入力：土屋隆

校正：田中敬三

2005年9月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

学者アラムハラドの見た着物

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>